募集要領添付資料２

泣塔について

所在　新庁舎等の敷地内の北側

柵の中に、木々におおわれた小高い丘があります。この丘の上に「泣塔」と呼ばれる石造の宝篋印塔（ほうきょういんとう）と、その後ろのやぐらの中に数基の五輪塔（ごりんとう）があります。

（鎌倉市教育センター（2019）、「かまくら子ども風土記（第 14 版）」、P. 263）

図 1　泣塔所在場所（令和５年（2023 年）１月撮影）

名称　石造宝篋印塔

鎌倉市指定有形文化財　石造宝篋印塔（文和五年銘）一基
（昭和 46 年（1971 年）９月 11 日指定）

この丘の上には、数基の五輪塔を納めたやぐらと、「泣塔（なきとう）」と呼ばれる石造の宝篋印塔があります。宝篋印塔は、舎利塔（しゃりとう）の一つの形式をいいます。総高 203cm の安山岩製で、関東形式宝篋印塔の典型といえます。

基礎の銘文には「願主行浄　預造立　石塔婆　各々檀那　現世安穏　後生善処　文和五年申丙二月廿日　供養了」と刻まれています。文和五年（1356 年）は、新田義貞による鎌倉攻めのあった元弘３年（1333 年）の 23 年後にあたります。この塔は当時の「洲崎の合戦」における戦死者の 23 回忌の供養塔として建てられたと考えられています。

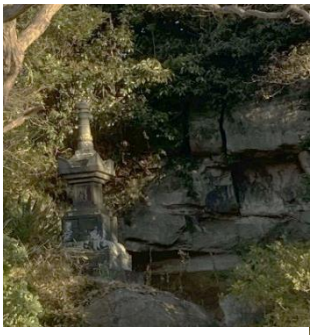

図 2　泣塔（同上拡大）

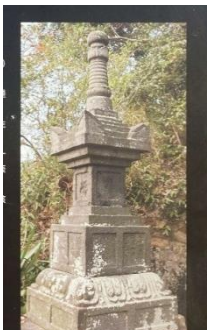

図 3　泣塔（現地説明板）

「泣塔」の名前は、この塔を手広の青蓮寺（しょうれんじ）に移したところ、夜な夜なすすり泣く声が聞こえたため、元の場所に戻したことに由来するなどといわれています。

（現地説明板（令和２年（2020 年）２月鎌倉市教育委員会））

現状・規模　反花（かえりばな）座から相輪まで完存し、総高は 203 センチ。

形状　安山岩製。反花座下部は輪郭によって二区に分け、輪郭内に格狭間は造らない。反花座上部には各隅に一弁、各辺に二弁の複弁反花を配する。基礎は輪郭によって二区に分け、上部の段形は二段。塔身は輪郭を巻き、金剛界四仏の種子（しゅじ）を配する。屋根は上部五段、下部二段の段形となっており、上部五段目は輪郭によって二区に分ける露盤となっている。軒から独立する隅飾は外側にやや傾斜しながら立ち上がり、内側は二弧で輪郭を巻く。相輪は伏鉢上に単弁の請花（うけばな）を造り、上部に向け細くなる九輪、単弁の請花、宝珠によって構成される。（中略）

学史的意義　鎌倉時代の端正さを残しつつも、所々に形式化がみられる南北朝時代の特徴をよくあらわす宝篋印塔である。　（吉川弘文館（2012）、「日本石造物辞典」、P. 346）

付近の現状　泣塔周囲崖面崩落のおそれがあり、立入禁止としている。